

津波減災に効果

3・11大震災 検証

防災林損壊

勢い弱めた役割

東日本大震災による大津波で、本県沿岸部の防災林に津波の威力を抑える「減災」効果があったことが分かってきた。一方で、多くの樹木が根こそぎ流されたケースもあり、民有林の損壊は約七割に上る。防災林はどのような役割を果たしたのか。津波に強い防災林をどう再生すべきなのか。震災当時を振り返り、検証する。

なくホテル周辺の水田や畑に津波が押し寄せた。ホテルの五階から横一線に白い波が迫ってくるのが見えた。

ホテルと海の間には防災林と川、沼があった。敷地内は周囲より一層ほど高く、建物への浸水は辛うじて免れた。

三月十一日の震災発生直後、いわき市平藤間の「かんぼの宿いわき」には宿泊客を含め約四十人の利用客がいた。新舞子海岸から二百五十メートルほどしか離れていない。海岸近くで

は、警察官が十以上の津波が到達する恐れがあると叫んでいた。総支配人の関場益次郎さん(五七)は従業員に指示し、約三十人の利用客をJRいわき駅やホテルから最も近い避難所の藤間中へ送り届けた。残った客約十人と従業員合わせて約四十人はホテルの二階以上に避難させた。間も



いわき市平藤間地区から南北に延びる海岸線沿いの防災林。津波の威力を抑える効果があったとされる＝14日、かんぼの宿いわきの屋上から

※海岸防災林 潮害や飛砂、風害対策を主な目的に整備され、クロマツなどが植樹されている。農地や居住地を災害から守る役割を果たす。本県の海岸線の延長は1,600キロ。



県によると、海岸防災林は東日本大震災の発生以前、民有林で約36キロ(15センチ)が整備されていた。このほか、国有林の海岸防災林も点在している。

帯は幅五メートルほどあり、海岸近くにもまばらな林があった。庭に海水が流れ込んできたが、被害は床下住している。「こんなに海が近いのに、家が残っているなんて奇跡だ」と驚きを隠せない。

「津波は(周囲に広がる幅約二百メートル)防災林を通過し、海岸線と並行に流れる横川で止まった」。いわき市四倉町下仁井田字須賀向の会社員根本勝則さん(五七)も防災林の効果を感じた一人だ。

海岸から県道を挟んですぐの所にある自宅は国の防災林に囲まれていた。自宅前の樹林

本県沿岸では、約三十六キロ(約二百五十センチ)ある民有林の防災林のうち、相馬海岸(相馬市)、鹿島海岸(南相馬市)、四倉海岸(いわき市)、平海岸(同)などで合わせて約二十

六キロ(約百五十センチ)が津波で損壊した。全体



林立していた防災林が津波で流失した相馬市の松川浦。21日

の約七割に相当する。最大規模の防災林は相馬市の松川浦に整備されていた。クロマツを中心とした林が立ち並び長年、高潮や防砂、



2011(平成23)年
10月24日
月曜日
発行所
福島民報社
福島市太田町13-17
(郵便番号960-8602)
電話代表 (024) 531-4111
編集局531-4119 広告局531-4153
事業局531-4173 販売局531-4178
購読のお申し込み
0120-373437
© 福島民報社 2011



福島民報ホームページ
<http://www.minpo.jp/>
読者センター 0120-803344

塩害被害の防止に役目果たしてきた。だが、九三センチ以上とされる大津波は約七十センチのほぼ全域をのみ込んだ。木々をなぎ倒し、数センチ離れた水田や住宅地などに押し寄せた。「根元からむき出しになつた相当数の流木が内陸に流されてきた」。松川浦沿岸の岩子地区の坂本正美区長(六三)は当時を振り返る。県は倒された防災林が津波のエネルギーを吸収し、内陸部の被災を抑える「減災」効果

3面に続く

があったとみている。